

徳島市民病院だより



徳島市民病院の理念

「思いやり・信頼・安心」

〒770-0812 徳島市北常三島町2丁目34番地 徳島市民病院
Tel(088)622-5121(代表)

平成31年

18号

平成31年3月



開院90周年の祝賀会開催

徳島市民病院開院90周年記念祝賀会が1月28日、苜原稔徳島大学大学院教授ら12人を招き、ホテルクレメント徳島で開かれました。当院からは、医師、看護師ら86人が出席、90周年の節目を祝い、100周年に向けての新たな一歩を踏み出しました。

冒頭、主催者を代表して曾根三郎病院事業管理者が「当院が県内の中核病院として発展できたのは、市議会、徳島大学、市医師会のご支援のおかげです。少子高齢化で医療環境はますます厳しくなりますが、100周年に向け人材を育成し、生き残りを図ります」などと開会の挨拶をした後、三宅秀則院長が当院の主な歴史と現状を報告しました。続いて病院開設者の遠藤

節目祝い、新たな一歩踏み出す

氏から祝辞を頂戴した後、宇都宮正登徳島市医師会長の発声で乾杯し、懇親会に移りました。懇親会では、病院事業管理者・

苜原稔院長が「当院は平成18年の経営形態の変更で、経営健全化の道筋ができました。周産期母子医療センター、関節治療センター、がんセンターの3本柱を中心に医療の質を上げ、ブランド力向上を目指します」などと挨拶しました。

来賓の挨拶では、苜原教授から「市民病院は県内になくてはならない病院です。100年を超えて市民の医療を守ってください。大学は全面的にバックアップします」と、これまでの当院の役割を評価し、100周年に向けエールを頂きました。この他、4



泌尿器科総括部長に 徳大講師の福森先生

4月から泌尿器科総括部長に
徳島大学病院泌尿器科講師の福

ふくもり・ともはる氏 1965年倉敷市生まれ。1991年徳島大学医学部卒。徳島赤十字病院医師、徳大医学部助手、米国カルマノスがんセンター研究員などを経て2003年から現職。日本泌尿器学会専門医・指導医、日本性機能学会専門医など。

院長経験者ら6人の先輩から、在任中の苦労話や思い出などが寄せられました。中でも第9代と第12代の2度にわたって院長に就いた現在92歳の矢野嘉朗先生は「私の時代は赤字続きで、職員のボーナスの原資にも事欠くありさまで苦労が多かった。皆さんのおかげで立派になり感謝しています」などと話し、第17代院長と第2代病院事業管理者の両職を務めた露口勝先生は「私の時も赤字が続き、『こんな病院はいらない』と陰口をたたかれたが、何くそと、超一流の病院を目指しました。現状を見て安心しました」などと語りました。

各テーブルでは思い出話や久しぶりの再会を喜び合っていました。が、定刻となり、平山元徳島市副市長の万歳三唱で祝賀会を終えました。



【その他の来賓の方は次の皆さん】丹黒章徳島大学医学部長、永廣信治徳島大学病院院長、西良浩一徳島大学整形外科教授、井上武徳島市議会議員、湊省初代病院事業管理者、先川知足第14代院長、日下和昌第16代院長、惣中康秀第18代院長以上

森知治先生が着任します。福森先生は前立腺がん小線源治療を専門とし、中高年男性で増加傾向にある前立腺がん患者に、最新の治療を提供してもらいます。

当院の糖尿病予防活動 教育入院や食生活改善



内科主任医長
井野口 卓

世界と日本の現状

成人（20～79歳）における世界の糖尿病人口は2013年現在で約3億8200万人に上り、今後も増え続け、2030年には約5億9200万人に達すると予測されています。また、日本を含む西太平洋地域は、特に糖尿病人口の増加が予測されている地域であり、2011年の成人の糖尿病人口は1億3190万人と、世界の糖尿病人口の36%を占め、2030年には1億8790万人に達すると



されています。

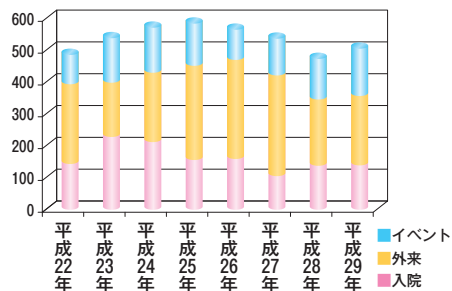
日本国内では、厚生労働省の2016年「国民健康・栄養調査」によると、糖尿病患者と糖尿病予備群は、それぞれ約1000万人とされ、合わせて約2000万人が糖尿病・糖尿病予備群と推測されます。

徳島の現状

徳島県は、1993年から2004年にかけて、12年連続で「糖尿病死亡率率全国ワースト1」という不名誉な記録をつくりました。県は「糖尿病緊急事態宣言」を行い、注意を喚起するとともに、県民総ぐるみによる健康づくりに関する取り組みを進めました。2007年にはワースト7と改善傾向がみられました。翌年から2013年にかけて、再び6年連続でワースト1となりました。2014年以降はワースト1を脱却しましたが、2017年は、またしてもワースト1という結果になっています。

その原因として、以前は運動不足を指摘されていましたが、最近の統計では、県民の運動量が増え、他県民との差はそれほどでもなくなっています。

糖尿病教室・イベントの参加者



ます。一方で、他県民に比べ野菜摂取量が少ないというデータが散見され、徳島県民に多い炭水化物中心の食事が主要因であると考えられています。食生活の改善が糖尿病予防のカギを握っていると言っても過言ではないでしょう。

当院の取り組み

本県の現状を踏まえ、当院は糖尿病予防教育に力を入れています。毎年50～60人の教育入院（7～14日間）実施のほか、糖尿病教室を毎週火曜日（14時～15時）に他職種連携（各科医師・看護師・薬剤師・栄養士・理学療法士・作業療法士・検査技師など）で開き、糖尿病についての啓蒙活動を行っています。生活習慣の改善や栄養指導、運動指導などもあり、参加者は年間320～450人に上ります。また、世界糖尿病デー（11月14日）



ご来院の患者さんで、糖尿病でお困りの方がおられましたら、当院の取り組みをご紹介します。よろしくお願いいたします。

内分泌・糖尿病内科

常勤医師 1人

外来 週2回 外来患者数 カルテベース 約350人

入院患者 年間約150人（うち教育入院54人）

糖尿病紹介患者数 平成28年 60人 平成29年 63人

がん豆知識



脳腫瘍

自分や家族が医師から「脳腫瘍です」と宣告されたら…。少なからず動揺されることと思います。確かに初診の時点で生命予後1年程度と説明しなければならぬ悪性の脳腫瘍も存在します。しかし、WHO（世界保健機構）は腫瘍の発生母地や細胞の形態および増殖能力、また最近では遺伝子診断も加え、実に150種類以上にも脳腫瘍を細分類しており、この中には手術で摘出できれば長期にわたって再発することなく生存できる腫瘍や、化学療法（抗がん剤）が非常に奏功する腫瘍、放射線治療で増殖抑制が期待できる腫瘍もたくさんあります。

脳腫瘍の初発症状は腫瘍の発生場所や大きさなどで異なりますが、頭痛や吐き気、まひ、歩行障害、しびれ、けいれんなどの症状が出現します。治療は他のがんと同様、初期でサイズも小さいがんが予後も比較的良好な場合が多く、怖がるよりも早めに専門医を受診されることをお勧めします。

現在、当院には5人の脳神経外科専門医（1人は非常勤、うち2人はがん治療認定医）が在籍しています。また、がんセンターでもある当院は、化学療法や放射線治療、緩和医療を行う際、他科の優秀な医師およびスタッフとの連携も速やかにとれる体制が整えられています。

「脳腫瘍です」と宣告した後、できる限り安心してその後の治療が受けられるよう支援して参りますので、今後ともよろしく願っています。

（脳神経外科診療部長 宮本理司）

患者同士の交流が心の支え
がん患者サロン「なごみ」誕生10年



岩井 久代

「突然、胆管がんと言われて、他にそんな病気の人がいるの？これから何に気をつけて生活すればいいの？いつべんに不安なことだらけになった。がんの人の気持ちにはがんの人にしか分からない。がん患者同士で話

「なごみ」
がん患者サロン

がん患者とその家族がづらい気持ちや不安を自由に話せる場。毎月第4木曜日（9・10月以外）の14時～16時に開催。参加費は無料で予約なく参加し、途中参加や途中退席も自由。サロンで知り得た情報は口外しないことや宗教や健康食品などの勧誘は行わないなどの約束ごとがある。患者支援センターと緩和ケアチームが協力して運営。

ができる場があればいいのに。79歳女性のこの言葉がきっかけとなり、がん患者サロン「なごみ」が誕生しました。

2009年9月に第1回が開催され、参加者は2人でした。がん再発の心配や日常生活での不安について話し合われたと記録されています。その後は、病院HPや掲示物、参加者からの口コミや医療スタッフの勧めで広がり、誕生10周年を迎える現在はいく日でも16人、平均で12人の方が参加されています。内容も季節感のあるレクリエーションや医療勉強会、ボランティアの方々によるイベントなど多彩になってきました。

参加人数が増えたこと、レクリエーション志向が強くなったことで、当初の目的である患者同士が語り合えない不安感を出出できる場となっているのか、と懸念され始め、2015年にアンケート調査を行っていません。アンケートでは、「楽しみにしている」「参加す



るとホッとする」「前日から元気が出る」と、患者同士や医療者と交流することが精神的支え（安心感）や活力となっていることが分かりました。また、「自分に発言の場所を提供してもらい感謝している」と、がん患者サロン「なごみ」の中で自分の役割を見出している方もいました。

今は内容にこだわらず、患者が安心して語れる環境づくり、ほっと一息つける居心地の良い、できるだけ敷居が低い場を設けることが何よりも大切だと考えています。患者サロンは私たち医療者にとっても学びの場です。患者も医療者も互いに関係性を築く中で、人として成長していける場になればと願っています。

（緩和ケア認定看護師 岩井久代）

リレー版
研修医日記



臨床研修医2年目 中村 将希

現在私が研修をさせていただいている徳島市民病院は私のような基幹型の初期研修医5人に加え、徳島大学病院からの、たすき掛けの研修医が数人おり、毎日非常に楽しく研修させていただいております。2年前、初期研修医として勤務し始めた頃は、今後の研修生活に対して不安ばかりを感じておりましたが、臨床研修センター長の田村公一先生をはじめとして、各科の先生方から非常に丁寧にご指導をいただき、次第に自信を持って患者さんの診療に臨むことができるようになりました。

徳島市民病院は二次救急を中心とした病院で、1分1秒を争うようなダイナミックな症例を経験する機会こそ少ないですが、common diseaseが十分に経験できること、それらの症例に対し、ご指導のもと、自身で診断・治療・処置などを実践させていただけることがとても多く、今後医師として働いていくうえで必要なさまざまな能力を身に付けることができたと感じております。市民病院での2年間は、医療者を志した私にとって単にスタートというだけでなく貴重な一歩となりました。

後期研修は他大学のプログラムにお世話になる予定になりましたが、いつかまた徳島に戻り、徳島の医療に貢献したく存じます。

栄養は病気の治療において欠かせないものです。外科手術後の創傷治癒に必要であることはもちろん化学療法の副作用発現の軽減などにも役立ちます。私たち薬剤師が入院患者の栄養管理に深く関わっていることをご存知でしょうか。今回は薬剤師の栄養への関わりについてお知らせします。



普段の栄養管理が重要

当院の病棟薬剤師は薬剤の管理と共に栄養状態や栄養療法について食事の摂取状況なども確認し、状態に応じて食事形態や栄養剤の選択に関与し管理を行っております。静脈栄養については投与量、投与経路、投与速度、配合変化の確認とTPNの無菌調整を行い、経腸栄養についても投与量、投与経路、投与速度、薬との飲み合わせ等について確認しています。

病気の回復を早めるのは普段の栄養状態が大きく関わります。栄養療法は病気になってから取り組むのではなく、現在、治療や入院が必要でない方も普段から栄養について考える必要があります。最近、高齢者の「フレイル」（高齢者の体重減少や筋力低下による運動機能の低下や認知機能が低下した状態）という状態について改善を行う取り組みが全国的に行われております。日頃の栄養について気になる方は、かかりつけ医師や薬剤師に栄養についても気軽にご相談ください。

（文・松田香織薬剤部主任主査
イラスト・伏谷秀治薬剤部長）



共通項目は高評価 入院患者満足度調査

昨年11月に実施した「入院患者満足度調査」の結果がまとまりました。日本医療機能評価機構に依頼し全国の同規模病院と比較した結果、最重要項目の、「当院を親しい人に薦めようと思いませんか」では、同規模38病院中、11番目でした。平均評価点は5点満点で4.53と同規模病院の平均点を0.11点上回るなど、概ね高評価を頂いています。

徳島医学会賞に松本さん

徳大大塚講堂で記念講演
「術前の栄養改善が重要」

当院リハビリテーション科理学療法士の松本明彦さんはこのほど、「第41回徳島医学会賞」を受賞しました。松本さんは徳島大学医学部大塚講堂で2月3日、約1000人の医療関係者を前に、受賞研



究の「消化器がん患者における入院時の栄養指標が退院時の Barthel Index に及ぼす影響について」の受賞記念講演を行いました。松本さんは、消化器がん患者の離床を進める上で Activities Daily Living (ADL) 能力に個人差があり、身体機能以外にもさまざまな要因があるのではないかと考え、当院の脳神経外科上田博弓先生をはじめ、リハビリテーション科江西哲也先

調査500人中、161人の入院患者さんから回答を得ました。男性が33.8%、女性が66.2%と圧倒的に女性が多く、年齢構成は70代が27%、60代20%と続き30代と80代が14%、40代11%、50代10%となっています。個別項目では「治療内容」「医師・職員の対応」「プライバシー保護」など共通調査の10項目全てで同規模病院の平均点を上回っています。全ての項目の総合平均評価点は85.2点と前回調査の86.0点をわずかに下回

生、西仁美S.Tの指導を受け、リハビリテーション科と栄養サポートチームの共同で研究を進めました。研究は、当院で消化器がんと診断され、手術を受けた患者91人を対象としました。入院時の栄養指標と入院時の Barthel Index データを検討した結果、消化器がん患者は入院時すでに多くの方が低栄養状態であることが明らかになりました。さらに入院時の栄養状態と退院時のADL能力に相関関係を認めたことにより、入院時の栄養状態はADL能力に影響することが分かりました。

松本さんは「入院前からの栄養状態の改善が重要であり、管理栄養士の介入が不可欠だと考えます」と述べ、「低栄養状態の患者には包括的なケアが必要であり、この研究が病棟での栄養状態、ADL能力の意識向上の一助になればうれしい」と話しています。



DMAT派遣で 県から感謝状

徳島県は2月1日、昨年の西日本豪雨、大阪北部地震での被災地支援活動に



対し、当院をはじめ徳島大学病院など県内19団体・法人に感謝状を贈りました。贈呈式に出席した当院のDMAT責任者である宮本理司脳神経外科診療部長に、飯泉嘉門知事が「被災者に勇気と希望を与えた功績はまさに多大」と感謝状を手渡しました。当院は昨年7月8日から10日まで、豪雨被害の愛媛県大洲市にDMAT隊員4人（医師、看護師2人、薬剤師）を派遣し、避難所アセスメントを担当しました。

勉強会では緩和ケア内科診療部長の片山和久医師が「がんと看取り」と題して講演。片山医師は「日本人の7割以上が自宅での看取りを希望しているが、現実には81%が病院で亡くなっている。終末期がん患者は精神的・身体的・社会的苦痛を抱えている。医療・介護者の私たちに求められるのは、その人の生きる意味を支え、苦しみを和らげ、軽くし、無くすことです」など

医療・介護 連携会開く 28施設・40人が参加



医療機関、介護施設、在宅支援関連施設の職員と当院職員が交流する第6回医療・介護連携交流会が2月7日、地下研修ホールで開かれました。県内28施設から医師ら40人が参加、当院職員約20人と意見交換しました。岡田リカ

と語りました。また、薬剤部の田岡寛之薬剤師による「医療用麻酔薬について」の講演もありました。その後、7つのグループに分かれ交流しました。院外参加者の内訳は、医師5人、看護師15人、介護支援専門員9人、社会福祉士6人などとなっています。